

# Eureka V

六年制通信 No.26 平成 29 年 12 月 8 日 (金) 号

No risk, no fun.

よく耳にする No risk, no return.というのは、恐らく投資のことを言っているのですが、経済は苦手なのでよくわかりません。投資をしようということは儲けようとしているわけですが、あるいは失敗するかもしれないと思って逡巡している人に決意を促すための諺でしょうね。きっと。「失敗をする危険のないところには、利益もない」ではないか、と、まあそんな意味でしょう。

この No risk, no return.が意味を持つ人というのはどういう人か。この言葉に心を動かされる人というのはどういう人なのか。もちろん return を強く求めている人に決まっていますよね。利益を得たいと思っていなければ、リスクがどうのこうのと悩む必要もないのですからね。つまり、No risk, no ~.では~のところに価値を置いているわけです。「~」を求めるのならリスクを覚悟しなさい、ということですね。

さて、先日 NHK の「プロフェッショナル」を観ていたら、久しぶりに「リスクがなければ楽しくない」という言葉に出会いました。No risk, no fun.ですね。一流と言われる人たちが昔よく口にしていた言葉です。今回は日本人で初めてウィーンフィル

のコンマス (concert master) になったバイオリニストの榎本<sup>だいしん</sup>大進さんが言っていました。この「リスク」というのは、辞書的な第一義では「危険」ですね。何の危険かという、もちろん失敗する危険ですが、丁寧に言えば、わざわざそんなことしなくても無難に切り抜かれる場面で「あえて新しいことに挑戦」する際に伴う危険のことをいうようです。ですから番組の文脈からはリスクを「新しい事への挑戦」と捉えた方がいいようです。榎本さんは、常に現状に不満足です。つまり一回の演奏に完璧とか完成とかはないのだから、目指すべき頂ははるか彼方にいつもある。その感覚が、新しいものへの挑戦へと自分を駆り立てる、そのようなことも言っていました。

先ほどと同じように考えてみると、No risk, no fun.が心に響くには根底に fun を求める気持ちがあるということですね。もっと言えば、榎本さんは「楽しさ」に大きな価値を置いているということです。はじめ、彼は非常に厳格な師匠について学び、泣いている暇があれば練習しなさいと言われて修行していました。その後、技術が向上してからついた師匠には、音楽家が楽しんでいなくてどうして観客が楽しめるのかと教えられたそうです。そういう経験から「楽しさ」の価値を自分から上げていったのでしょうかね。ウィーンフィルからのオファーにも、これは相当リスクを伴うと素人でも思いますが、果敢に挑戦します。きっと、未知なる「楽しさ」がそこにあると考え

たからだと思えます。

確かに番組中、榎本さんは英語やドイツ語を駆使しながらメンバーと楽しそうに意思疎通を図り、常にワンランク上の演奏へと導いているようでした。でも、私が感動したのは彼の孤独に耐える姿でした。個性の強いメンバーたちは初めから榎本さんを認めたわけではなかったようです。中には口もきいてくれない人もいたらしい。一時期、孤立してしまうのですね。その時彼が苦しみながら一人部屋にこもって、バイオリンの練習をしている姿を奥さんが見ています。あの時間が貴重なのですね。

榎本さんの活躍するような超一流の舞台でなくても、たとえ私たちの日常であっても、楽しさというのはその辺に転がっていたり天から降ってきたりするものではないということを知らなくてははいけませんね。私は楽しいということにそれほど大きな価値を置いてはいませんが、それはともかく、何事も初めから楽しいことなどあるわけがないと、若い君たちには伝えたいと思います。特に、**fun** が大きくなればなるほど **risk** も大きくなるという関係を知る必要があります。その **risk** を乗り越えるには孤独に耐える精神力が必要だということを、榎本さんは口にはしていませんでしたが、番組の中で見せていたように思います。少なくとも私はそう感じました。

これから皆さんは **No risk, no ~** の「~」のところを見つけていくのでしょうか。皆さんが激しく求める「~」が見つければいいですね。また、それが困難であればあるほど上がっていくであろう **risk** に果敢に挑戦できるよう、若いうちから孤独に耐える訓練をしておくといいと思います。

### 今週のおすすめ

・清水義範 『日本語必笑講座』 (講談社文庫)

清水さんの『国語入試問題必勝法』(講談社文庫)の方が有名でしょうが、ま、どちらも面白いと思います。『日本語必笑講座』では政治家やアナウンサー、広告に至るまで不思議な日本語を俎上に載せています。紹介しています。笑った後に、いやいやこれは笑い事ではないぞとってしまいます。中にひとつ私のお気に入りがあるので紹介します。名古屋における「えーていかんて論争」です。名古屋において「ここは私がおごるわ」、「いやいやそんなことしてもらわなくて結構です」という、レジ前で行われる二人のおばさんの会話なのですが…。

「今日は私がはらうわ」

「あ、いかんて、いかんいかん」

「えーて、えーて、えーて」

「いかんて、いかんて」

「たまには、ええでいかんがね」

「いかんでかんて。そうはいかんもんで」

「えーて、えーて」

「いかんて。本当に奥さん、それはいかんで、ええわね」

この本にはこんなのがたくさんあります。面白いよ。